
春とIS

シュガー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春とIS

【Nコード】

N0220Y

【作者名】

シュガー

【あらすじ】

主人公篠ノ乃春は束と共にISの研究をしていた。そんなある日春は一夏に渡されるはずのISに手を触れ反応する。戸惑う春に対して束は千冬に春がISを操縦できる事を伝える。気づくと春は二人目の男の操縦者として、IS学園への入学が決まっていた。話は春が入学試験を受けるところから始まります。駄文ですがよろしくおねがいします。

入学試験 前編（前書き）

この小説はIS インフェニット ストラトスの二次創作です初心者ですがよろしくおねがいします。更新は受験生なので二週間に一本のペースです。よろしく願います。

入学試験 前編

「へえここがIS学園かい、さすが国が作っているだけあるねー。」
とスーツケースに座りながらオッドアイで長い金髪を一つにまとめた少年は眼を輝かせていた。少年はふと呟いた「千冬さん遅いなーまだかなー。」と校舎の方を眺めていると黒いスーツを着た長身の女性、千冬さんが歩いてきた。織斑 千冬 春の幼馴染である織斑 一夏の姉であり、春の姉である束の幼馴染で第1回IS世界大会で総合優勝および格闘部門優勝を果たした世界最強の女姓である。

千冬は春の前に着くと口を開いた。

「久しぶりだな春大きくなったな？」

「久しぶりです千冬さん。ちなみに何で疑問系なんですか？」

「いや、最後に会ったときからあまり伸びていないなと思ってな。」

「伸びましたよこれでも！！それにまだまだ伸びます！！」

「そうかまあ良い時間が押しているので急ぐぞ。」

「え？急ぐってこれから何かやるんですか？」

「ああそつえば何も言っていなかったなおまえの入学試験をこれから行なう。」

「入学試験は何をするんですか？」と春は聞いた。

「教師と模擬戦をしてもらっつ。」

「分かりました。」

次回に続く

誤字脱字アドバイスなどおねがいします。

入学試験 前編（後書き）

初めての投稿でおかしい所があると思うので気づいた方はコメントおねがいします。

入学試験後編

えーっとまあアイデアがないのでダラダラ書きます。

「ここが更衣室です。早めに着替えてください。」

「分かりました。」

と言いつつISスーツの入った袋を受け取った。 疲れている

のだろうか？今自分の目には145cmのサイズのISスーツがある。しかし、どこからどう見ても、女物にしか見えない物がそこにはあった。仕方がないので先生を呼んで変えてもらう事にした。 .

．．．．．気分が悪い。女物のISスーツを男なので男用のISスーツに変えて欲しいと頼んだ。すると千冬さんを除く全員から、驚かれた。悲しいを通り越してどうでも良いと思えてしまった。自分は身長はともかくそんなに女顔なのだろうか？とまあ色んな事があったが、自分は今自分のISストライクを展開して待機している。

「模擬戦を開始します。」

模擬戦が始まった。日本の第二世代機 打鉄が近接戦用のブレードを展開して切り掛かって来る。それを左側にイグニツツブーストで移動する事で回避すると、武装の確認をする。

「ハアアア？」

思わず言ってしまった。なぜならばこのISには頭部バルカンとアイマーシュナイダーという、小型のビームナイフの2つしか武装がなかったのだ。どうする？と思った瞬間横殴りの衝撃が襲った。

「何？」

ISのハイパーセンサーで見ていると、打鉄がいてブレードを構えていた。そしてイグニツシュブーストで距離を詰めて来た。慌てて後ろに下がりつつ、バルカンを撃つ。

ドガガガガガ！！

当たった。すぐにこちらでもバランスを崩した打鉄目掛けてイグニツシュブースト（瞬間加速）で距離を詰めて切り掛かる。しかし、次の瞬間には打鉄は距離を、取り一気に後ろへ、回りこんで切り掛かってきた。避けようとした次の瞬間には、切られていた。次の瞬間ストライクは解除された。

「模擬戦終了勝者山田麻邪」

と音声が流れた。その時負けたと春は気づいた。

入学試験後編（後書き）

誤字脱字がありましたらすいません。アドバイスありましたら、よろしく願いします。

入学式と自己紹介 前編（前書き）

すいません、文章力はありませんがよろしくおねがいします。

入学式と自己紹介 前編

「ハア」

何でこうなっただろう。

とため息をつきながら周りを見る周り全員女子であきらかに僕と一夏の二人は様々な意味で浮いていた。校長先生が話している一夏達と一緒に小学校に行っていた頃の校長先生の話と同じぐらい眠くなってしまうそうだ。とまあなんとか無事に入学式も終わり教室でのんびりとしていた。一夏が自分の事を気づいていないのか、声をかけて来ないので、久しぶりと自分から声をかけた。

「え？誰。」

と返された。仕方がないのでこちらから篠ノ之春だと言う事を伝えた、束姉が話しているはずだけどなあ。とおもっていると一夏が声を掛けて来た。

「ひょつとして君が二人目のISを起動させることに成功させた男子？だよな。」

気のせいだろうか。今の一夏の言葉の中に？があつたような感じがした。しかしそれは、次の一夏の言葉で確定へと変わる。

「えーっと、やっぱり女子が男子の制服着ているから男子かもしれなと思うたんだがごめん。」

春Side

一夏の目には僕は女子にしか見えていなかったのか。悲しいを通り

越してどうでも良くなったよ一夏。

君は束姉が言うほど勘が鋭くはなかったんだね。残念だ。殺しても良いよね、束姉と思いつつISを展開しようとしたが。

「全員揃ってますねー。それじゃあショートホームルームはじめますよー。」

教室は静かだった。理由は極めて単純でクラスにISを世界で初めて起動させる事に成功させた織村一夏と二番目にISを起動させた男なのか？篠ノ之春がいるからである。

「え、ええと、私はこのクラスの副担任になりました。山田真耶です。皆さん一年間よろしくお願いします」

また全員が無言で反応はなく、真耶は涙目になっていたのであわて、春がフロアに入って泣かずにそのまま続ける。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと………」
出席番号順で織村一夏くん」

また無言、女子の視線は一夏に集中する。一夏は気づかないというより眼がどこかを泳いでいる。

「織村君？あのー織村一夏君？……織村一夏くんっ！」

「はいっ？」

声を裏返して返事をする一夏、クスクスとおもわず他の女子と一緒に笑ってしまった。

「え、えつとそれじゃあ織村君、自己紹介を・・・」

「あ、はい」

席から立ち上がり教卓へ向かい教卓の前に立つ一夏。クラス全員の視線を浴び固まっていたが、ようやく口を開いた。

「えーっと・・・織村一夏です。よろしくおねがいします。」

と言い口を閉じる、だが、僕やクラスの女子の思いはもっとしゃべって欲しい等の「多くの意味が込められていた。そしてそこからしばらく沈黙が続く一夏は口を開き

「以上です」

ガタタツ！一夏の発言に期待していた僕や何人かの女子はイスから崩れ落ちた、趣味とか好きなものを喋ればいいのに、あつという間に終わらせてしまった。あまりのことにあの真耶先生も涙目になっている。するとドオン！！とあり得ない音が響いた、一夏が恐る恐る後ろを振り返ると

「ゲエツ、関羽！？」

ドゴンとありえない音が出席簿からした。角で叩かれたようだ、

「誰が三国志のキャラクターだ馬鹿者」

そこには一夏の姉である折斑千冬の姿があった、手にはいつもどおり出席簿をもっていた。

「あ、織村先生。もう会議はもう終わられたのですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

死に掛けている一夏を後目に真耶と一言交わした後、千冬さんは喋り始めた。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人1年で使い物になる操縦者に育てるのがしごとだ私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15歳を16際になるまでに鍛え抜く事だ逆らっても良いが、私の言う事は聞けいいな。」

と言うと教室は静まり返る、そしてしばらくすると

「キヤーーーーーーー！千冬様、本物の千冬様よ！」

教室中に黄色い声援が響く、あまりの音量に窓ガラスが震える。最近の女子高生は音波攻撃でもできるのだろうか？いやきっとできても何かしら不思議ではない。

すいません書きたいのですが母親と父親という爆弾が落ちてきたので明日残りを書かせてもらいます。申し訳ございません。

入学式と自己紹介 前編（後書き）

後日 明日の内にはなんとしても投稿します。

入学式と自己紹介 後編（前書き）

先程投稿できる環境になったので投稿します。

入学式と自己紹介 後編

「ずっとファンでした」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」
等すごい数の声が聞こえた。肝心の千冬さんを見てみると溜め息をついていたがその後一夏を見るなり

「で？挨拶も満足にできんのか、お前は。そしてお前まだ自己紹介すらやっていないのか？って聞いているのか、お前は・・・」

「み、耳があーーーー」

頭の次に耳をやられてしまった。一夏はまだうずくまっていた。

「何をやっているのだ馬鹿者が」

一夏が何か言おうとしているけど出席簿で本日3回目となる出席簿アタックを喰らって喋るに辞めた。

「織斑先生と呼べ」

「・・・はい、織斑先生」

やり取りが終わった時には一夏が千冬さんの身内だと言う事を知られるのには十分であった。

「えっ？織斑君ってあの千冬様の弟・・・」

「それじゃあ、男子で『IS』を使えるっていうのも、それが関係

して……」

「ああいいいなあ。代わって欲しいな」

と他の女子達が騒ぐ千冬さんは何事もなかったかの用にスルーし

「まあいい、篠ノ之、次はお前だ」

「えっ僕ですか？」

「そっださつさとしろ」

千冬さんに急かされ席から立ち上がり教卓の前に立つると全員の視線は春に集まる。ドイツイギリスフランスの3国を束と一緒に2年ごとに移り住んでいた春は普通に挨拶を始めた。

「僕の名前は篠ノ之春です。趣味はゲームと読書と写真を撮ることです。よろしくおねがいします」
と言った。すると

「へえ僕っ娘が良いわね。あの顔と声のアンバランスさが良いわね。後身長も体格も。」

「肌白いわねー日本人とは思えない」

「金髪にあの金と銀のオッドアイ、かわいいわね。」
等色々言っていた。のでとりあえず春はいった。」

「僕は男です。」

と言った。するとクラス全員から驚かれた。やっぱり女にしか僕は

見えないのかと落胆していた。」

すると

「篠ノ之弟もう良いぞ席に戻れ」

と言われたので席に戻った。その後の自己紹介はあんまり耳に入ってこなかった。

S H R が終わった。

すると隣の一夏が話しかけてきた

「俺は織斑一夏よろしくな男子同士仲良くしようぜ」

と言って手を差し出してきたので僕も手を出した。

すると、確か上沼さん？が篠ノ之君×織斑君もありね等叫んでいた。
はぁ・・・と

溜め息をつきたくなった。がそれと同時に予鈴がなり全員が席に着いた。

授業が始まったので授業に意識を切り替えた。

「・・・であるからにして、ISの基本的な運用は国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は刑法によって罰せられ・・・」

授業も順調に進んでいて束姉に教えてもらった部分の発展だったの

である程度は分かったので大丈夫だったが隣の一夏は教科書に穴が開くほど見ていたのでまさかとは思ったが念のために聞いた。

「一夏どうかしたの分からないの？」

と聞いた。すると案の定予測していた回答が出てきた。

「ああ、全く分かん。」

「織斑君、どこか分からない所がありますか？」

と春と一夏のやり取りが聞こえたのか真耶が聞いてきた。

「えっと、いいですか」

「はい、分からない時のために先生はいるのですよ」

「全部分かりません」

「え……………」

一夏の一言によって僕を含むクラスにいる全員が固まった。

「…………織斑、入学前の参考書は読んだか？」

ダースベーターのBGMが合いそうなオーラを出した織斑先生が聞いた。

「古い電話帳と間違えてすてましっ」

ドゴーン！

本日4回目にして最大の破壊力をもった。出席簿アタックが一夏の言葉が終わらない内に一夏を机と言う名のマットへと叩きつけた。

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」

「・・・すみません」

「後で再発行してやるから1週間以内に覚える。いいな」

「い、いや、1週間であの厚さは難しいような・・・」

「やれと言っている」

「・・・はい、やります」

自業自得だと思う。

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遙かに凌ぐ。そういった『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ理解が出来なくとも覚える。そして、まもれ。規則とはそういうものだ」

千冬はそう言いまた教室の端へ戻っていった、固まっていた、真耶も復活し授業は再開したのであった。

入学式と自己紹介 後編（後書き）

ふう、指が痛い。次回はセシリアさんの登場です。

機体設定（前書き）

春の使用するISの設定です。ガンダムSEEDのストライクに
+何かオリジナルで盛ります。駄文ですいません。

機体設定

機体設定

ストライク

第3世代機

春の専用機。3種類のストライカーパックというパックを換装することによって遠距離戦や近距離戦、高速機動戦など様々な状況にも対応出来る機体。

固定武装

10mmバルカン2門

ミサイルの迎撃や敵を牽制するために使う。2門あり1門に50発しか入らないため無駄使いは出来ない。×2で弾は100発

アーマーシュナイダー×2

ナイフ。内部に爆薬とバッテリー兼モーターがあり、モーターで刃を高速振動させ、装甲に刺すことが可能。更に刃に爆薬を搭載しているのでそのまま爆発させて相手にダメージを与える事が可能。

PS装甲

装甲に電流をながす事により、装甲を硬質化し実体剣や実体弾を無効化する装甲。これによってシールドエネルギーが減る可能性はバッテリー切れでPS装甲が切れる事と威力の高いビーム兵器による攻撃を除いてはない。尚PS装甲は一定の電力供給によって行われているので、実体兵装に当たれば当たる程電力消費はかさんでいき、エネルギー切れになってしまう可能性が高まる。

ノーマルストライク

ストライカーパックを付けていない状態のストライクこの状態のストライクはバッテリーの容量が少なく4分程しか戦えない。武装は10mmバルカン(ヘッドバルカン)×2門。弾丸の数は50発ずつと少なく牽制や接近するミサイル等の迎撃に使う。

アーマーシュナイダー×2

接近戦用のナイフ。刃の中には爆薬を搭載しており、相手の装甲に突き刺した後、爆発させる等して爆弾として使えるほかに、中のバッテリーで刃を高速振動させて、切れ味を上げる事ができる。

機動力、スピード1500km/hと共に第3世代で武装は第2、第3世代初期の攻撃力しかなく、4分程でエネルギー切れになる。近接戦闘用。航続距離111km

ランチャーストライカー

武装

53mm高エネルギービーム砲 アグニ

3mを超える砲身が特徴でその重さ故に支持アームを使わなければ撃つ事が出来ない。ランチャーストライカーのメイン武装にして第4世代に匹敵する火力のビーム砲連射可能。又その火力故に1回でかなりのバッテリーを消費し、20発撃っただけで、バッテリー切れになってしまう。エネルギー消費が最も激しい武装。

58mm2連装ガンランチャー

誘導弾、無誘導砲弾双方を射出可能2発搭載出来る。

20mmバルカン

ガンランチャーの防衛装備。弾薬数は300発と多い。中近距離向けの武装。攻撃力は強く、敵を寄せ付けない。

ランチャーストライカー用シールド

機動力の低いランチャーストライカー用に作られたシールド。ビームコーティングがされており実体装備には弱いですが、ビーム兵器には強く、こわれにくい。

機動力第2世代スピード第3世代1500km/h 航続距離1125km 武装第4世代 遠距離戦の装備 戦闘継続時間2分45分

エールストライカー

高速機動装備エール

高速機動用の4つの高出力スラスタと4つのラジエーターも兼ねた飛行翼を持っている。高速機動による戦闘に特化したパック1800km/hで一時間の飛行が可能。高速機動戦の装備

ビームサーベルx2

粒子をトンファー状に展開して剣として使用する。攻撃力は第2世代末期の攻撃力以下だがエネルギーの消費が少ない。

シールド

エールストライカー用のシールドで実体武装に強く灰色の鱗殻と第4世代

の武装を除く攻撃に耐えられる。パイルバンカーの攻撃も2回目まで

耐えられる。ビーム兵器もスターライトによる攻撃を受けてもある程度は持つ。

6mm高エネルギービームライフル

中・近距離エール用装備で取り回しが利く上に200発も撃て、更に片手で撃てるのでよい。威力はセシリアさんのスターライトにやや劣るが第3世代相当の性能を持っている。

高速機動戦向きでエネルギーをそんなに消費しなく扱いやすい。機動力、スピード1800km/hで共に第4世代で航続距離は1800km/hで武装は第3世代初期の攻撃力 戦闘継続時間1時間
〜1時間30分

ソードストライカー

武装

ビームブーメラン「マイダスメッサー」

近接戦用のソードストライカーに付けられた装備。奇襲やフェイントに使う。また、大容量のバッテリーコンデンサーを搭載しているため、単体での飛翔が可能であり、切れ味が高いため相手の装甲を切り裂く事が出来る。また、爆薬が搭載されているので、相手に当たってから爆発させる事でダメージを与える事が可能である。第2世代末期の攻撃力をもつ。

ロケットアンカー「パンツァーアイゼン」

アンカーで相手を捕捉もしくは相手の装甲を破壊する。しかし、特殊繊維のケーブルであるため扱いづらい上に、ケーブルの特性を理解して瞬時に判断して使わなければならず、扱いがかなり難しい。破壊力第3世代。

2・76m接近戦用ブレード「シュベルトゲーベル」
全長2・76mと言うストライクの全高に匹敵する長さをもつ近接戦用のレーザー・実体刃複合近接戦ブレード第2世代の装甲ならば、一撃で絶対防御を発動させるだけの切れ味を持つまた、切っ先からもレーザー刃を展開する事が出来る。接近戦での取り回しの悪さをカバーする。接近戦用の装備

機動性第4世代相当スピード第2世代程度900km/h武装第4世代航続距離750km 戦闘継続時間30〜45分

機体設定 (後書き)

すいません。何かあったらコメントどうぞ。

主人公設定

名前

篠ノ之春

身長

145cm（身長や容姿の事を言われると怒る）

性別

男（女にしか見えない）

容姿

華奢で体は丸みを帯びている上に肩幅も腰も同年代の女子よりも細く肌はセシリア並に白いまた金髪にナノマシンを両目に入れられているため金と銀のオッドアイ。ちなみに両目共に眼に適合していない。10人に10人が振り向く美少女また声からしても女子。

春「僕は男です!!」

備考

日本で生まれる、両親は日本人で眼、髪共に黒だった（このころも女子に間違えられた）。6歳ごろまでは普通に過ごしていたが7歳になる前後に両親を事故で亡くす。又その時に両親が大量の遺産を持つていたため親戚の遺産争いに巻き込まれ、結果的に決まった親戚に引き取られるが、遺産を取るだけ取ると、春の戸籍を友人が勤めているドイツの研究機関（無許可）に引渡し春を捨てる。そのため春は心を失ってしまふ。尚二年後に特殊部隊によって他の数人と共に保護される。また二年間の間にナノマシン『ヴォーダン・オージエ』を両目に入れられた、更に反射神経の強化や聴覚の強化をされISに乗れる事が判明するがランクはDと乗れるだけだったためランクを上げる為に薬物で上げさせられていたその最中に保護された。またその後イギリスで2年間カウンセリングと薬物を体内から取り除く治療を受ける。その後ナノマシンの制御の仕方を身に付ける為ドイツに帰国して二年かけ身に付ける。その後篠ノ之束に出会えばフランスで二年過ごす予定だったが一夏に渡す為に作っていたIS白式にすっかり触れてしまい、ISに乗れることがばれてしまい更にIS適正がAだったためISに行く事になる。一人称は僕。

主人公設定（後書き）

やばい、テスト終わってなんかはじけた。

ドイツ代表候補生とイギリス代表候補生の衝突 前編（前書き）

すいません設定追加で春はドイツ代表候補生です。名前は篠ノ之春を日本にいる間の一時的な名前にして感想にアリアを入れて欲しいと要望があつたのでボーデビツヒアリアを本名にします。

ドイツ代表候補生とイギリス代表候補生の衝突 前編

二時間目の休み時間、一夏は死んだ魚のような目をしながら机に突っ伏していた

「一夏、大丈夫？授業分かった？」

「……まったく分からん」

完全に授業についてゆけず頭から煙が出ていそうな一夏を春は心配する

「まあ、僕も分かるところなら教えてあげるからがんばってとりあえず追いつこう」

「うう、すまん春」

と他愛もないやり取りなのだがその場面を必死にメモしたりスケッチをしている女子が何人かいたが春は気にも留めずに一夏に教えていると

「ちょっとよろしくて？」

「ん？」

「はい？」

一人の女子生徒が立っていた、長い金髪にブルーの瞳をしたきれいな白人の少女だった、でも春は何故か彼女の纏っている雰囲気が

好きになれそうにはなかった。

「聞いてます？ お返事は？」

「ああ、聞いてるけど……どういう用件だ？」

「聞こえています、イギリス代表候補生の貴女が何の用ですか？」

「まあ！ なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「・・・・・・・・・・」

少女の上からな物言いに春は不快感を覚えた

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

知っておかないと駄目だよそこは！と春は心の中で突っ込む

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

「あ、質問いいか？」

一夏が手をあげてセシリアに質問する

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

ガタンッ！！一夏のこの質問にはさすがの春もあきれ椅子から落ちた

「あ、あ、あ・・・」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

セシリアは無知すぎる一夏に腹を立てたのか怒り出した。と春は間に入り一夏に分かりやすく丁寧に教える

「一夏、代表候補生って言うのはISの国家代表の候補生の事で国から専用機が与えられるんだ。いうなればエリートで僕とセシリアさんはそれにあたるんだ。」

「なるほどな・・・って事は春も専用機を持っているのか！？」

「うん、ドイツ代表候補生で専用機の名前はストライク。三種類のバックを呼び出す事によって高速機動戦、接近戦、遠距離戦と一機で様々な状況にも対応出来るように作られた機体だよ。それに実体兵装は効かないようになっているよ、まあさすがに衝撃は来るけどね」

と話していると

「そう！ エリートなのですわ！」

と話している二人に指を指しながら話すセシリア

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とはクラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか、それはラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの？」

「特に、大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが。ここに入る以前は普通の男子中学生だったんだからな。なあ、春？」

「う、うん」

残念ながら春は、普通ではなかった。

「え？あなた男でしたの？……」

「ふん。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

「結構です」と春は言いたかったが外交問題になってしまうのであえて言わなかった。

「ISのことではわからないことがあれば、まあ泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「ISを動かして戦うやつなら、俺も倒したぞ・・・春はどうなんだ？」

「・・・・・・僕は機体の武装が固定武装しかない状態でやって負けたよ」

「は・・・・？ わ、わたくしだけと聞きましたか？」

啞然とするセシリアに一夏は追い討ちを掛ける

「女子ではってオチじゃないのか？」

この一言で完全に地雷という地雷を踏みつくしセシリアの顔は赤くなった

「あ、あ、あ、あなた、わたくしをぶ・・・・」

セシリアの言葉を遮りチャイムが鳴った

「くっ・・・・・・話はまた後で。逃げないことね！ よくって！？」

そう言いながら自分の席にセシリアは戻っていった。

「まだ立っている奴、とつとと席につけ」

どうやら二時間目は千冬が授業をするらしく、真耶はノートを手
にしている。

「ああ、授業の前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決
めないとな」

意味が分からないらしく一夏は首を傾げていたところを千冬が全員
に聞こえるように言う

「クラス代表者とはそのままの意味だ。ちなみにクラス対抗戦は、
入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいし
た差はないが、競争は向上心を産む。一度決まると一年間変更はな
いからそのつもりでいろ、まあ、俗に言えば学級委員みたいなもの
だ」

教室内が少し騒がしくなった、すると一人の生徒が手をあげて

「はいっ、それなら私は織斑君を推薦しますっ！」

「あたしもそれが良いと思いまーす」

「じゃあ、私は篠ノ之君に」

「私も」

と言った、それに便乗し数人が一夏に票を入れる、さらに春にも
票が入れられる。

「候補者は織斑 一夏に篠ノ之 春……他にはいないか？ 自

薦他薦は問わないぞ」

とここで春は口を開いた

「すみません、でしたら僕はセシリアさんを推薦します」

「お、俺っ!？」

一夏は同じタイミングで反応するがその声よりも先に反応した声があった。

「あ、貴方私を誰だと思っ・・・」

「イギリス代表候補生だと思っています、また、イギリスのブルーティアーズについて知りたいので推薦をしました」

「せつ、先生こんな事おかしいですわ」

と怒りに震えた声で言うが

「辞退は認めんぞ」

と無情な千冬の声が響く

が怒りが収まらないの一夏に的が移った

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術を修練しに来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

侮辱もエスカレートしていき

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

触れぬがためと見てみぬふりもをしていた春も見過ごせなくなり
会話に乱入するが

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては」

とここで春は口を開く

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「いいかげんにして下さいこれ以上恥を晒すのはやめてください他の代表候補生の質が疑われます」

一夏も切れていた様で春と一緒にタイミングで言う。

春にいたっては周りの女子と同じ声でありながらもものすごいオーラを醸し出していた

「あ、貴方、わたくしの祖国を侮辱するのですかー！」

「侮辱？何を言ってるのですか、それは貴女です、僕は注意をしただけです」

「ああ、そうだな」

「決闘ですわ！」

二人を指差し、セシリアが宣言する

「ああ、いいぜ、やってやるよ」

「受けて立ちます、政府から機会があればイギリスの第三世代機を倒せという指示があったばかりなのでやらせてもらいます」

春と一夏もやる気十分であった。

「言っておきますけど、負けたりしたらわたくしの小間使い　いえ、奴隷にしますわよ」

「ああ、いいぜ。小間使いでも奴隷でも何にでもなってやるよ！」

「いいですよ、でも、僕は負ける予定はありませんが」

と言った後、三人は睨み合った。

「さて、話はまとまったようだな。それでは勝負は次の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコット、篠ノ乃はそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

千冬は手を二回叩き授業を開始した。

（絶対に勝つ）

春は気に入らない女、セシリアに勝利するための算段を立て始めるのだった。

ドイツ代表候補生とイギリス代表候補生の衝突 前編（後書き）

どうですかね？少し春が黒くなっていますが

ドイツ代表候補生とイギリス代表候補生の衝突 後編（前書き）

指が痛くてつらいけど指が止まらない!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!

ドイツ代表候補生とイギリス代表候補生の衝突 後編

セシリアの決闘宣言から時は経ち、放課後になった春はあれから授業そつちのけで、さらに昼食の時になっても尚対セシリア戦の戦術プランを立てていた。（あまりの集中で一夏の声も耳に入らなかった）

「ああ、織斑君に篠ノ之君。まだ教室にいたんですね。よかったです。」

「「はい？」」

呼ばれて顔を上げると、麻耶が書類を片手に立っていた。

「えっとですね、二人の寮の部屋が決まりました。篠ノ之君と織斑君の部屋は申し訳ないですけど相部屋となります。」

麻耶の手には、部屋番号の書かれた紙とキーが握られていた。それを、一夏と優希に渡す。

IS学園は全寮制であり、生徒は全員寮で生活することが義務づけられている。これは将来有望な生徒達を勧誘する様々な国から守る為の措置である。

「俺の部屋、決まっていんじゃないじゃなかったですか？前に聞いた時に一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど」

「やっぱりそうになりましたか」と春は苦笑する。

「それなんですけど、事情が事情なので一時的な措置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。……二人とも、そのあたりのことって政府から聞いてますか？」

「どうやらドイツ政府の指示らしかった、なんせ前例のない『男』のＩＳ操縦者なのだ、国としても監視と保護の両方を兼ねているのだろう。」

「そう言うわけで政府特権もあつて、とにかく寮に入れるのを最優先してみたいです。一ヶ月もすれば二人の方も用意できますから、しばらくは我慢してくださいね」

「そうですか、部屋の件はわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう帰っていいですか？」
「わかりました」

「あ、いえ、織斑君の荷物なら……」

「私が手配しておいたやつた。ありがたく思え」

と、千冬の声が聞こえたときＢＧＭが脳内に流れたのは春だけではないはずだ。

「「あ、ありがとうございます」」

「まあ、生活必需品だけだがな、篠ノ乃のほうは先に持って来ていたようだな助かった」

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、織斑君と篠ノ之君は今のところ使えません」

「え、なんですか？」

意味がわかってないらしく一夏は、真耶に聞いたのだが

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

と千冬に言われジト目で見られるのだった。

「おつ、織斑君っ、女子とお風呂に入りたいんですか！？ダ、ダメですよ！」

「い、いや、入りたくないです」

一夏は慌てて否定したが

「ええっ？女の子に興味がないんですか！？そ、それはそれで問題のようない……」

麻耶の方は暴走していた

「織斑君、男にしか興味ないのかな……？」

「それはそれで……アリね」

「相手は篠ノ之君……これだわー！！」

と麻耶は叫んでいたの＋一部女子は騒ぎ出す、その光景に春は溜め

息を吐くのであった。

「えっと、それじゃあ私達は会議があるので、これで。」

「あつ、織斑先生。少し宜しいですか？」

「どうしたんだ篠ノ之？」

教室から出て行く千冬たちを春は呼び止めるのだが、鞆を持ち帰ろうとしていたのだが、春の行動に気づき、話に入ってきた。

「あ、一夏。僕、ちよつと織斑先生に話があるから先に帰っていいよ」

「え、なら俺待つけど」

「うっん、ちよつと長くなりそうだから、いいよ」

一夏待つと言うが春はやりわりと断った

「そうか、じゃあまた後でな」

教室から出て行く一夏を春は見送った

「もういいのか、篠ノ乃？」

「はい、織斑先生、届いたパツクの性能試験をしたいのでアーリーナを貸して欲しいのですが。それと放課後のアーリーナの使用許可も」

「ISとアリーナをか……分かった、後で職員室に来い。今から私達は会議だからな……二時間後に来い」

春の申し出に千冬は悩むしぐさをしてから、職員室に来るように言った。

「わかりました」

「では、私は行くぞ」

「はい、お時間取らせてすみません」

「別に構わん」

と言い千冬は教室から出ていった、春は腕時計を見た。

「ん、二時間か、どうしようかな？」

空いた時間をどう過ごすのか悩む春

「あつ、そつだ」

何か思い出したのかポケットに手を入れて、部屋番号の書いてある紙を取り出す

「とりあえず部屋に行こう、まずはそれからだね」

と言い寮の自分の部屋に向かう春であった。

「うん、ここだね1046号室キーっと」と言いながらノックをする

「はい」

と声がした確認をしてから中に入る

すると中には着ぐるみをきた女子がいた

「えーっと、初めまして今日から、この部屋に越してきた篠ノ之春です、よろしくお願いします」
と挨拶を済ませる

が返事はない見て見ると寝ていたので荷物を置いて部屋を出る

そしてやる事も無く外を歩いていると

すばあんっ！と音が響いた音のした所へ行ってみるとそこには竹刀を片手に倒れた一夏と何事もなかったかのように立っている篤がいた。そのあと30分程二人を見てから職員室へと向かった。

コンッ、コンッ

「失礼します。織斑先生はいらっしゃいますか」

「ん？来たか篠ノ之。こっちだ」

扉をノックしてから職員室に入り、千冬のことを尋ねる。すると千冬はこちらに気づいたようで春を呼び寄せた。

「ISの武装テストと、アリーナの使用許可だったな」

「はい」

「データの採取は一人で大丈夫か？」

千冬は聞いてきたので大丈夫ですと答える。

「はい、国家機密なので」

「そうか・・・では、これがアリーナ使用の申請書だ。」

千冬は五枚ほどの紙を春に渡す

「明日から使いたければ六時までに提出しろ、書くなら私の隣を使え、急げば間に合うだろう」

現在の時刻は五時三十分。一枚、六分の計算である。

「うわ、時間無いじゃないですか。」

千冬の隣の席に座り大急ぎで申請書を書き出す春であった。

「五時四十五分二十秒、余裕じゃないか」

千冬は最後の書類を確認し判子を押した。

「ま、間に合った」

「ああ、これで明日から使えるぞ」

何とか時間内書き終えた春は机の上になんか突っ伏していた

「しかし、お前は行動が早いな、あのバカに見習わせたいくらいだ」
弟のことを思い出し、溜め息をつく千冬

「……篠ノ之、お前は本気でオルコットに勝つつもりか？」

「当たり前ですよ。勝つつもりじゃなかったらあんなは啖呵切りませんよ」

千冬の問いに、筆記用具を片付けながら答える春

「同じ代表候補生でもセシリアとお前では倍以上の運用時間の差がある勝ち目は薄いぞ」

「わかってます。そのために練習するんです」

「そうか……なら、せいぜいがんばれよ」

「はい」

と言い春は職員室を後にした

ドイツ代表候補生とイギリス代表候補生の衝突 後編（後書き）

終わった

クラス代表戦（前書き）

今回はセシリアさんやられます。

クラス代表戦

あれから武装テストや練習をしている間にクラス代表戦当日になったが結局射撃が得意なのでランチャーとライカーとエールストライカーの二種類に絞って練習を行なった

ビットで準備をしていると一夏は口を開いた

「なあ、箒」

「なんだ、一夏？」

春達はアリーナのビットで戦いの時を待っていた

「気のせいかもしれないんだが、ISの事について何一つ教えてもらっていない」

その言葉を箒は何事も無かったかのように聞き流す

すると一夏は諦めたのか春に話しかけた

「なあ、今更だけどISについて何一つおしえてもらってないんだが何か今すぐ出来る事は無いか」
と言った

苦笑いしながら春は言った

「無理!!!!!!」

それを聞いた一夏は落胆する。すると音声で指示が入ってきた

「篠ノ之君ビットゲートに行つて下さい織斑君の機体の到着に時間が掛かるので先に行ないます」

それを聞いた春はストライクを展開してビットゲートに向かった

「一夏、じゃあ行つて来るよ」

「頑張つてこいよ」

と声をかける

「篠ノ之 春、ストライク出ます」

と言つて空高くスラスタ―光を残しながら飛んで行つた」

春はゲートから出るとランチャーストライカーを展開してセーフティを外しながら先にアリーナに出ていたセシリアと高度を合わせる。

「あら？逃げずに来ましたのね」

そこにはブルーティアーズを身に纏つたセシリア腰に手を当てたポーズで浮いていた。手にはデータにあったスターライトmk-?が握られていた。また6個のビットもついていた

「それにしても遅かったですわね。てつきり、もう1人の方と負けるの」

「代表候補生としての自覚を持つて下さい、いい恥さらしだ」と答える、すると

「言いましたわねっ！」

と顔を真っ赤にしながらストライク目掛けて撃って来たがそれを春はランチャー用シールドで防ぎ後退する。そしてビットを撃つには最適の条件にした。するとチャンスと思ったのか何かを言いながらビットをこっちの思惑通りビットを展開する

「来た」

と右目の射撃用のナノマシンを活性化させビットに狙いを定める

「いけっ」

三連射してビット一つ落とす。更に20mmバルカンでセシリアに命中させる。セシリアは慌てて回避するがそれと同時に残り5個のビットを一つ残らず落とした。そのころ別の所では

「すごいですねえ篠ノ之君、私でも勝てなかったビットをこつも簡単に落とすなんて」

と麻耶は感嘆の声を上げる

「ああ、でもいかなあれは、機体の性能に頼りすぎている」
と千冬は言った

「確かに言われて見れば」
と改めて気づいた麻耶

そのころアリーナでは

「喰らいなさい！」

とスターライトで春を追い詰めるセシリアの姿があった。

「勝てる！勝てますわ！」

と思っていたセシリアだったが、次の瞬間それは覆られた

「負けてたまるかあっ」

と追い詰められていた春がシールドでセシリアのライフルを防ぎながらアグニを2発放つ。

するとその二発は肩のアーマーに命中した。

セシリアが怯んだ瞬間を見逃さずミサイルを二発放ちながら残った20mmバルカンでセシリアを牽制する、ミサイルがセシリアのスターライトに命中した。その瞬間スターライトは爆発した。そしてランチャーとライカーの武装を使い切った春はランチャーとライカーを解除して腰からアーマーシュナイダーを二本出しセシリアに突っ込む。

「なんですって？」

と言いながらインターセプターと叫びブレードを展開して切り結ぶ。

「勝たせてもらおう！」

と春が言いヘッドバルカンを放つ

「それはこっちのセリフですわ」

とセシリアが言い返しながらか回避する。

どちらも満身創痍だが諦めておらず、春はバルカンで牽制をしつつ切り結んでいた。

アリーナの客席からは二人に声援が送られる。

が、終わりは唐突に訪れた。「これで終わりだー」と春がブルーテイアーズ被弾箇所にアーマーシュナイダーを投げ爆破させて一気に

突っ込んでブルーティアーズの右マニピレーターごと切断して被弾箇所に突き入れた爆破させた。「試合終了 勝者 篠ノ之春」とアナウンスが流れた。

「よ、よし勝ったぞ……………」

「貴方大丈夫ですか？」

と声を掛けるが

「な、何とかね……」と言い高度を下げ着陸する。すると周りからは二人に対しての声援が鳴り響いた、そして二人はISを解除して互いに握手をかわした。すると周りからは黄色い声上がる中には「可愛い」などの声が多く含まれていて溜め息をつきながらビツトに戻るのであった。

クラス代表戦（後書き）

駄文ですが、どうでしたか？何か問題ありましたら、感想をお願いします

クラス代表戦 中編（前書き）

やばい日付が変わった

クラス代表戦 中編

「まさか連戦で戦う事になるとは」

と疲れた顔でビットゲートへ向かう春。春はなぜ連戦で戦うハメになったのか回想を開始した。

「つ、疲れた……」

と疲れた顔でビットに戻って来た春を待っていたのは予想外としか思えない二人だった

「やっと戻ってきましたか」

と麻耶が言う。嫌な予感しかしなかったので恐る恐る春は聞いてみた

「あのーそれはどういうことですか？」

と聞いた春だが次の麻耶の言葉を聞きそれは現実となった

「実はですね、予想よりも早く織斑君の専用機が届いたので前倒しでオルコットさんとの試合を行なう筈だったんですが……」

「え……行なう筈だったって事はオルコットさんが戦えなくなっただって事ですよね、何ですか？」

と春が聞くと

「それはおまえとの戦闘が原因だ」

と後ろからおぞましいオーラを纏った声が聞こえてきた。千冬の声だと分かった春は地雷を踏まないように注意しながら恐る恐る聞いた

「あのーひょっとして先程の試合が原因ですか？そんなにダメージを与えたつもりはなかったんですが」

と言ったがその声に会話」を中断されていた麻耶が反応した

「えつとですね、さっきの試合でオルコットさんのISのダメージレベルがCに達していて休ませないといけないので篠ノ之君と織斑君の試合を前倒しで行なうことが決定したので伝えにきたんです」と胸を張りながら答えた麻耶

「え？拒否権は？」

速攻で春が言うと

「篠ノ之お前はオルコットのISにダメージレベルCという与えてオルコット対織斑戦を実質延期にしたな」

と怒気を含めた声で春に伝える

「ええ、確かに僕がしてしまいました」

と怒気に押された春が血の気が引いた顔で答える

「それに、本来はオルコットと織斑の試合が予定されていたがそれがお前によって延期になった、つまりだここまで言えば篠ノ之分かるな？」

と春に問いかける

「は、はいっ分かります！」

と震える声で答える春

「そうか、それを聞いて安心した」

と普通になった千冬が言った

「よし、戻るぞ山田君」

と言った。終わったと思った春がホッと息をつくが

「試合の開始は三十分後だそれまでに二人とも準備をしておけ」と千冬の声が響く

謀られた！！と思った春だったが反論する気力も残っていなかった
ので

「わ、分かりました・・・・・・・・・・」
と言いつつその場に座り込む

その言葉を聞いた千冬が今度こそは本当に戻っていった

謀られたと思いながら準備に取り掛かる春だがうしろから

「大丈夫か？」

と一夏が心配そうに声を掛けてきた

「そんなわけないでしょ・・・・・・・・」

と弱弱しい声で答える春

「とりあえず一夏は自分のISの慣らしもしていないんだから先に
したほうが良いよ」

と春は言い一夏と別れてヘッドバルカンの弾丸とアーマーシュナイ
ダーの補給とストライクの整備をすませてビットゲートに行った

回想終了

回想を終えストライクを展開した春がビットゲートから出て行った

「一夏はどこかなー」

と言いつつながら一夏を発見した春は高度を合わせてオープンチャンネ
ルで一夏に話しかける

「一夏、そのISの名前は？」

と尋ねる

「ああ、こいつの名前は白式だ」
と一夏は答える

「とりあえず初心者と言っても手加減しないから」
と言いエールストライカーを展開してビームライフルで一夏に照準を定める

「ああ。こっちも負けるつもりはない勝たせてもらうぜ春」

「望む所です倒させてもらいます」

と同時にビームライフルを放つが一夏はそれを左に瞬間加速する事で防ぐがそこにヘッドバルカンの弾の嵐に突っ込みシールドエネルギーを減らす。

「ゲワツ!!!!!!!!!!」

衝撃に驚いた一夏が思わず声を上げて止まる。その隙に残ったヘッドバルカンの残弾とビームライフルを撃ちながら後退して高速機動で白式を翻弄する。200発の内180発を撃ち終えた所で一度撃つのを辞めた

白式は何とか飛んでいたが装甲は所々はげ絶対防御が発動してもおかしくない状態だった

「これならこっちの勝ちが決まった」
と春は思いながら残った20発で白式に回避行動を取らせて誘導して追い込む、そしてエネルギー切れになったエールストライカーを収納してアーマーシュナイダーを投げつけて起爆させた。

「勝った」

と笑みをこぼしていた春だったが次の瞬間爆発した煙の中からブレイドを持った白式が飛び出してきた

「そんなバカな!？」

と慌ててもう一本のアーマーシュナイダーでブレードを受け止めるがここであり得ない事が春の目の前で起きた。

「超硬貨金属で作られたアーマーシュナイダーが切り落とされた!？」

とその事に気づき慌てて回避しようとするが

「ガンッ!!!!!!!」

とモロにブレードの攻撃を喰らいすさまじい衝撃を春を襲う

「クッ!!!!!」

とすぐにP I Cで機体を立て直し機体をチェックする。

「なっ!?! P S装甲を貫通しただって?」

とS Eが最初600あったのに対し350と一撃で250も減らされた事に固まった春だったが次の衝撃でまた300というS Eをまた失った春は回避行動を開始して使ったもりのなかったソードストライカーを展開してシュベルトゲーベルを展開して切り掛かる

「やられてたまるかあっ!!」

と切り掛かってきた白式に・・・

クラス代表戦 中編（後書き）

続きは後編で書きます

クラス代表戦 後編とその後（前書き）

あ、焦った

クラス代表戦 後編とその後

「やられてたまるかあつ」

とその声を聞いた一夏は切り掛かろうとしたストライクを見た

「なっ！？まだ他のパックがあつたのか！」

驚きを隠せずに固まる一夏、一夏のSEはビームライフルによって削られているため発動タイミングを考えなければ、一夏の負けが確定するのに対しパック換装によってエネルギーがフルになっていた。どうするかと思った瞬間

「よそ見をするなあ」

と叫びながらシュベルトゲベルのレーザー刃を展開して春が切りかかるが、剣道によって鍛えられた反射神経と技術力で春の攻撃を全てかわしていく

「くっ！なんで当たらないの？一撃の重さはこっちが上なのに」

と言いながら切りかかってくる春の攻撃を最小限の動きで零落白夜を用いずに弾いたりして難なくその攻撃をかわす。

「くそっ、だったらこれで」

と言い斬り合いに持ち込むために接近して、パンツァーアイゼンで白式の右腕をクローで切断しようとして出力を上げるがそれに気づいた一夏がワイヤーを雪片式型で切断する。とここで春が口を開いた

「一夏、言い事教えてあげるよ、それには高性能の爆薬が搭載されているんだよ」

と笑顔で答える春

とつさにクローを破壊しようとした一夏だったが

「遅いよ、一夏」

と言ひ白式の右腕に付いたパンツァーアイゼンを躊躇うそぶりもみせず自爆させる
とその瞬間アリーナは一面爆発によって発生した煙で何も見えなくなる。

徐々に煙が晴れて白式が姿を現したがその右手首から先をこっそり失ひ、白かった装甲も所々が黒ずんでおり損傷のひどさが見て伺える状態になっていた。

「やってくれるな春」

と千冬以上のオーラを出しながら冷静になった一夏が雪片式型を左手に構えて切り掛かうとするがマイダスメッサーを牽制のために投げるが

「邪魔だ！」

と最小限の動きでマイダスメッサーを、雪片式型で両断して尚も瞬間加速で突っ込みながら切りかかってきたが

「試合終了勝者 篠ノ之春」

とアナウンスが響き思わず

「えっ！？」

「なっ！？」

と素っ頓狂な声を上げる

「な、何でだ？」

と一夏が喋るが

「後で教える、とりあえず他のクラスも使うからすぐに戻れ」と千冬に言われ二人は戻った

「貴様は、何をしてくれた（怒）」

と春は完全に切れた千冬に怒られていた。

千冬はそれ程怒っていない（さっきの2倍30％）らしかったが、
んなのはウソで人間から出せるとは思えない殺気に怯え涙をこぼし
ながら、震えながら話を聞いていた。

「ゴツ、ゴメンナサイ」

と本気の本気で謝るが

「シンゴブド……！」

と春の首のすぐ横にブレードを刺しながら千冬は言う

「そんな、簡単な一言で済むと思っているのか」

と笑顔で言う千冬、そんな見るに耐えない状況に、セシリア、一夏が春を助けようとするが、

「大丈夫だちょっとお話をするだけだ、そうだよな春」

と小柄な分細い肩に手を置き力を少し込める

[illegible]

と声にならない悲鳴つを上げる春

「チヨツ、それい……」

と一夏が言いかけるがそれをセシリアと箒が口を止める

「一夏さんこれ以上口を挟んだら春さんが」

と言いながら春を見るとそこには恐怖により泣きじゃくる春と笑顔（切れた）の千冬の姿があり全員が固まった

「ど、どうする（んだ）」
と三人で悩んでいると

「何をしているんですか！」
と声が響く

「救いの手が来た」
と全員が振り向くがそこには麻耶が立っていた

「どうした、山田君？」
と最大時の50%まで切れた千冬が言うが

「先生会議です、先生がいないと始まらないので来て下さい」と言いあつけに取られた千冬を引っ張っていった。
姿が消えると即座に春の元へ駆け寄るが

あまりの恐怖に意識を失いながらも
「ごめんなさい、許してくださいごめ・・・」
と尚も泣きながらつぶやく春の姿があった

日常（前書き）

イージスとかの他のSEEDの機体を出してみたい

日常

「うつっ」

と言いながら春は目覚めるとそこは部屋だった

「気がついたか春大丈夫か？」

と一夏が声をかけた

「うん、大丈夫だけど、試合終わった後からの記憶がないんだ」
と言ったがその言葉に一夏は

「世の中には知らないほうが良い事があるんだ」
と言い急ぎ足で部屋から出て行った

「んー追い出せないな」
と言いながら春は今歩いていた

「はーはー大丈夫ー」
と同室の通称のほほんさんが声を掛けてきた

「うん大丈夫だよご飯食べたー？」
とのほほんさんに聞くと

「うつん、まだだよー」
と言ったので

「じゃあ、一緒に食べようよ」
とのほほんさん
「いいよー」

と断る理由もないので言う

「じゃあ、また後でー」

と言い歩いていると

「春さん大丈夫ですか？」

とセシリアから声をかけられたが先に言う事があったので言う

「オルコットさんISの事・・・ごめんなさい」

と謝るがその返答は意外なものだった

「ええ、大丈夫ですわそれとセシリアと呼んでもらって構いませんわ」

と言い握手を求めてきたので春も手を出して握手をする

助かった!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

と思いつつのほんさんの方に行こうとすると

「クラス代表について話したいことがありますわ!」
と言ってきた。

「え？代表やらないとダメですか？」
と答える春

「いいえ、実は一夏さんを代表にしたいんですわ」
良かったあああ!と思いつつそれに賛同すべく

「ええ、僕もあれがISを二回目であそこまで使えるなんて、代表

にしたらひと皮むけますよ」

と言いい夏を代表にさせるコメントを言いい夏を代表にして副代表の座を勝ち取った

「はーはー早くー」

とのほほんさんが春を呼ぶ

「あ、すみませんまた明日」

と言いい席に行って食事を取った

代表決定（前書き）

家族から嫌われる悲しいね

代表決定

翌日教室に行くと一夏が声を掛けてきた。

「おはよう、春」

と眠たげな顔の一夏が言った

「おはよう一夏」

と言いつつ席に座る

「HRを始めますよー」

と言ひ麻耶が言いHRが始まった

とここでクラス代表が一夏だという事が伝えられ一夏が仰天した

「え、何で俺なんですか普通に考えて春やセシリアじゃないんですか？」

と反論するが

「それは私が辞退したからですわ！」
とセシリアが追撃をかけ更に

「一夏はISを起動させて二回目なのに代表候補生の僕を圧倒させたんだよ、それだったら、代表にして力を付けさせたほうが良いでしょ」

と一夏を褒めるが

「じゃあ、二人とも試合に出ないのかと言っている」と

「大丈夫だよ一夏、僕も副代表で出るから」
と言う

「よ、良かった」

言い安堵の息を着く一夏

「がんばって一夏」

と言い一夏に全てを託した。

「ああ、分かった」

と話しているとチャイムが鳴ってHRが終わった。

織斑一夏の災難 前編

知識を詰め終えた春達は4月の下旬にはISの飛行訓練を開始していた

「これよりの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコツト、それに篠ノ乃。試しに飛んでみせろ」

春は腰に付けたナイフに手を当てて集中してISを展開させる

「おいで、ストライク」

その瞬間春の体が粒子につつまれた。粒子が消えるとそこには、メタリックグレイの状態のストライクがいたが遅れてPS装甲が起動して鮮やかなトリコロールに色が変わる

「きれいですわね」

とセシリアがつぶやく

「すごいな、それ！」

と一夏が言う

「まあね」

とフルフェイスのマスクと全身装甲から良く分からないが嬉しそうな声で春が喋っていると

「よし、飛べ」

と言われたので、スラスターを噴かしてセシリアにやや遅れながら

上昇する。一夏は更に遅れながら上昇していた。そして、セシリアと同じ高度で停止する。

『お速いすわね。春さん』

とプライベートチャンネルでセシリアが話しかけてきたちなみに二人の仲は、春が副クラス代表になったと日の夜にセシリアが部屋にやってきてお互いの暴言を謝り合った時に、春がセシリアを部屋に招き入れて話し合っていたら自然と仲良くなっていた。（春が満面の笑みで「これで友達ですね」と言った瞬間セシリアは春の可愛さに抱きしめたい衝動に駆られたのは内緒である）

「いいえ、違いますよストライクの性能が高いだけです」と答えるが

「いいえ、スペックもありますが結局は使う人間の腕ですわ、春さん」

「いえいえ」

等と話していると白式が遅れてやってきた

「つ、疲れた」

と言っていると

「何をやっている。スペック上の出力では白式はブルー・ティアーズとストライクよりも上なのだぞ」と千冬さんからお叱りを受けた急上昇と急降下のイメージが掴めていなく春とセシリアに聞いてきたが春とセシリアはイメージは人それぞれで違う事を知っているので自分が一番やりやすい方法を模索する方が良いという事を伝えるが一夏は

「何で浮くのか自分からないんだよ」

と白式の翼状の推進機関を見て呟く一夏だが

「説明しても構いませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動波干涉の話になりますわよ」

難しい言葉を聞いた一夏は即座に断り春に聞いたが

「ごめん、一から説明するから4時間は掛かるよ」
と言った。

「いいえ、結構です」
と即座に断る一夏

「でも結局慣れちゃえば気にならないよ」
と言った

「それに今日もやるんでしょ」「」
と春は言った

あの試合が終わった日から一夏は春とセシリアによって徹底的に鍛えられていた。最初の頃は一夏の幼馴染の筈がしていたが抽象的な表現で教えていて全く一夏が理解出来ていなかったの春とセシリアの二人が教える事になったのである

セシリアの知識は理論的すぎて分かりにくいがそれを理解出来る春が一夏に分かりやすく教える事によってお互いの欠点をうまく補いながら教えていた

「ああ、するぞ」

『一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く降りて来い！』

と麻耶からインカムをひったくりオープンチャンネルで通信を入れてきた。セシリアと箒は現在一夏をめぐって戦っているので腹を立てたのだろう。と分析をしていると

「織斑、オルコット、篠ノ乃、急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ」
と指示が入る

「了解です。では一夏さん、春さん、お先に」

と、二人に言うとセシリアは地上に向かって急降下する。そして地表十センチのところ完全停止した。

「やばい！！！！！！！！！！」

と思いながら春も地上に向けて急降下を行なう

（基本を思い出せ）

と言いながらあと少しで衝突するという所で全スラスターを吹かし停止する

「14cmかもう少し待っても良かったな、その調子で練習すれば次は出来るはずだ努力しろ」
と言われたので

「はいっ、ありがとうございます」
と言い息をつくが

「はっ、春頼むどいてくれー！？」

「フエツ？」

と慌てて確認するとそこにはもう目前に迫っていた白式の姿があった

とその瞬間に体中に凄まじい衝撃が春を襲った。周りでは大量の土煙が上がりまわりにいた女子が悲鳴を上げるそして徐々に土煙が晴れていくとそこには大きなクレーターができていたその中心には。

「い、い、い、い、い」

「ちゅううー」

一夏が春（美少女）を押し倒しているような状態が出来上がっていた。二人とも先程の衝撃でISを解除されており生身である。そして、一夏の両手は春の胸に伸びており、はたから見れば完全に氣を失っている美少女をケダモノが襲っている図であつた。そこを見逃す女子生徒ではなく。

「キヤア——」

。　　。

「」

先程とは違う意味でクラスメイト達が悲鳴を上げる。

「お、織斑君と篠ノ乃君、決まりだわ！！夏はこれで決まりよ！！」

「力、カメラが、こんな時カメラさえあれば……」

「やっぱり、あの二人そういう仲だったのかな、キヤーーーーー！」

「うわあ、篠ノ乃君ってやつぱり美人だよね……」

「じゅるり」

その悲鳴で意識が戻った春は状況を整理してとりあえず一夏の手をどかそうとしたが脳がフリーズした一夏はそのまま、言うてはならない一言を呟いてしまった

「可愛い」

と。それを聞いた春はストライクを展開しランチャーストライカーを展開して零距离で20mmバルカンを放つ

更にそこに二人の修羅が現れた。

「春さん混ぜてもらってよろしくて？」

と笑いながらスターライトを構えるセシリアと

「一夏死ね！！！！」

と打鉄に乗った篤が叫ぶそして

「あれを早い内に殺りましょう」

と笑いながらアグニを至近距離で一夏目掛けて放つ春

「一夏覚悟しろ（しなさい）」

と残ったふたりも全力で一夏を殺しに掛かる最終的にこの戦いは授業が終わるまで（白式が飛べなくなるまで破壊するまで）続けられたのだった

「うっ、体中が痛え」

とうめきながら一人で淡々と片付けとグラウンドの穴埋めをする一夏の姿があった

「責任を持って全てお前が片付けろ、3人の話を聞く限り原因はお

前だ」

と言われ他の皆が授業をしているのにただ一人でする事になったことを思い出しながら一人で頑張る一夏がいた

「お、終わった」

と言いながら一夏はボロボロの体を引きずって寮へと戻っていたが

「一夏、訓練は」

と満面の笑みを浮かべながら走ってくる春と修羅たちの姿があった二人に至ってはどす黒いオーラを出しながら来ていた

「やばいいいいいい！！！」と「逃げ出す一夏だったが目の前に緑色の光線が駆け抜ける。おそろおそろ振り返るとそこには

「逃げちゃだめだよ一夏」

とエールストライカーを装備したストライクで向かってくる春の姿と二人の修羅がいた

「だ、だめだ」

とあきらめた一夏はおとなしく訓練をする事にするが……

「一夏おそいよ、殺っちゃうよ」

とビームライフルで狙いを定める春に

「殺らせてもらいますわ」

スターライトで無表情のセシリアによる波状攻撃

「……………」

と無言で切り掛かる筈がいた

言うなれば一夏は今3対1で訓練という名の処刑を受けていた。無論専用機が大破した一夏は打鉄に乗っているが、第二世代一機で第三世代二機に勝てるわけも無く

「ぎゃああああああああ!!!!」

と叫びながら被弾に被弾を重ねていき……

「くそおおお!!!!」

と叫びながら停止して止まっていた

が3人はここである事に気がつく

「これって……やばい」

と言い慌ててアリーナから出て行く

「た、助かった」

と息をついている

織斑一夏の災難 前編（後書き）

続きあとでかきます。

織斑一夏の災難 後編

「た、助かった」

と息を整えながら打鉄から降りるとそこには、

「1日に二回も問題とはいいい度胸だな織斑」

とそこには出席簿を一夏めがけて振り下ろす千冬の姿があった

「千冬姉違っんだ、これには理由が！」

と言おうとすると

「問答無用！」

と言いkillerモードになった千冬に出席簿で殴られて意識を失った一夏がいた、その頃3人はというと

「いただきます」

と食堂で食事を取っていた

「篤さん、セシリアさんやりすぎちゃいましたね」

と笑いながらケーキを食べる春と二人の姿があった

「いや、むしろ足りないくらいだ」

と篤は言いセシリアは

「あれくらいがちょうどいいのですわ」
とセシリアは言い

「あと少し遅かったら確実に捕まりましたね」と話し休憩していた。

「クラス代表戦に出れるのか？」と篤が言つと

「今日のあれだと確実にダメージレベルはC近くまで?????????」

と言つ春だが

「そうだ、だからお前が代わりに出ろ」と片手で一夏を持った千冬が言つた

「はっ!？」

その声に驚き振り返るとそこには千冬がいた。

とりあえず春は「分かりました」といい出ることにした。

織斑一夏の災難 後編（後書き）

おかしい

パーティと写真撮影（前書き）

頑張ろう・・・・・・・・・・・・・・・・

パーティと写真撮影

「一夏ゴメン……」

「いや、気にすんな……」

と歩きながら話しているのは春と一夏である。一夏は凹んだテンションで喋り、春は土下座をしていそうな声で喋っている。最も一夏に至ってはクラス代表戦のために練習した日々が無駄になり代表から外されてしまい無表情で話している（副代表はセシリアになった）。が一夏が無表情なのは代表就任パーティが自分のせいでやや残念な雰囲気になっていいるからであるが……

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君と篠ノ乃春君に特別インタビューをしに来ました！」

と何故かこのタイミングで来た新聞部の二年生の黛薫子が最大の原因でもあったりする

「まずは織斑君ずばり、クラス代表になった感想をどうぞ！」

薫子は一夏にずっとボイスレコーダを向ける、その瞳は子供のように無邪気に輝かせていたが次の一夏の言葉で大変な事になった

「すみません、俺の専用機損傷がひどくて代表戦に出れないんです代表は春ですよ」

と凹んでいる一夏、周りを薫子が見渡すと「ハハ……」と乾いた笑いをする春と自分は関係が無いと言わんばかりに顔を背ける筈と副代表になったセシリアがいたが、薫子は二人ではなくこの状況を改善するために春に狙いをさだめ

「篠ノ乃君、代表就任の感想をどうぞ！……！！！」
とテンションをあげて言う

「えっと、とりあえず代表候補生としても代表としてもがんばらせてもらいます」

とそれらしい言葉を浮かべ喋ると

「うーん、良いねえ」

と言いながら、次の狙い目掛けて向かって行く薫子の姿があった

「セシリアちゃんもコメントちょうだい」
と言うが

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表、副代表を辞退したかというと、それはつまり……」

「あー長くなりそうだから写真だけちょうだい、文章は適当に作るから」

とセシリアに見切りを付けた薫子は

「何で一夏君の専用機壊れたの？」

と一夏にボイスレコーダーを向けている薫子の姿があり

「やばい（ですわ）」
とそれに気づいた二人が止めに入るが……

「いや訓練中に3対1で春とセシリアと戦って落とされてその後ダメージレベルを見たらcを超えていて」
と話す一夏

逃げる！！と即座に思った二人はそこから逃げ出そうとするが

「どついう事かなー詳しく話聞かせてもらつよー」
ボイスレコーダーを向ける薫子の姿があつた。仲間を探すが

「いない！！！」

と言いながらすでに先に逃げていた事に気づき逃走を謀ろうとする
が……………

「つかまえたっ」

と逃げ出す間もなく薫子に捕まる

「何でー？」

とボイスレコーダーを薫子が向けるとそこには

「え、え！？あの、そ、それは」

と涙目になりながら喋ろうとする春の姿があつた。それを見た女子は

（（（（何？この可愛さ、やっぱ女だよね））））

と頭の中で言っていたがその隙について脱出する春の姿があつた

「っ、疲れた」

と言いながら逃げ切った春が外を歩いていると

「見つけたー」

と言つ声が聞こえた振り返るとそこには女子が数人、逃げようとする

るが前からも

「発見!!!!」

とカメラと携帯を構えた数人の女子がいた

逃げようとするが逃げ切れるわけもなく、パーティを行なっていた食堂に連れ戻される春とセシリアの姿があった。どうなるんだ!と考えていた春とセシリアだったが

「はいはい、三人並んでね。写真撮るから」

と言う言葉を聞き安堵する春と一夏と写真を撮れるという事で嬉しそうにセシリアの姿があった

「注目の専用機持ちだからねー、はいはい並んで並んでー」
とカメラを構えて言う薫子

とセシリアと一夏の事を考え気を利かした春が左へ移り真ん中に一夏を移らせるが.....

「.....」

「なんだよ、箒」

「何でもない」

と言う箒の姿があった

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は?」
と言うが誰も分かる訳がなく

「正解は74・375でしたー」

と薫子の声が響くが……

その瞬間にクラス的女子全員が神業としか見えないスピードでカメラに収まっていた。

「なんで全員入ってるんだ？ていうか何で箒が隣にいるんだ？ってか全員？」

と一夏の声が響く

「……／／／」

「あ、あなたたちねえっ！」

「マーマー」

「セシリアだけ抜け駆けはないしょー」

「ねー」

「う、ぐ……」

セシリアは文句を言おうとするがクラス全員に丸め込めようとするがセシリアは苦虫をかみつぶしたような顔になる、それをクラスメイト達はニヤニヤしながら見ているのであった。

その姿を見ながら春は苦笑していたが、その目の前ではセシリアと箒がにらみ合っていた

となんだかんだでパーティは10時ごろまで続いた

「ね、眠い」

と言いながら部屋へと戻る春だが部屋へ戻る前に力尽き廊下で寝て

いた。

「ふう、今日は大変だった」

と言いながら筭と一緒に部屋に向かい歩く一夏だが

「あれ？あれって春だよな」

と言いながら春を発見したがここに置いていくわけにも行かないと判断した一夏は運んでいく事にした

「よつこらせつと、軽いな32㍻33kgぐらいかな？」

と言いながら春を抱き上げる一夏だが

（女子にしか見えねえ）

と思いながら運んでいた

「ふう、ここだよな春の部屋」

と言いながら部屋の扉を叩く一夏

「はい」

とのんびりとした声が響くとりあえず開けてもらつ事を頼み、扉を開けてもらい春を部屋に運び入れる一夏だがいきなりのほんが春の服を脱がしていた

「なっ？」

と言ひ慌てて後ろを向く一夏だがその顔は真っ赤になっていたが5分程経つた所で

「おりむーこつち向いてもいいよー」

とのほほんの声が響き落ち着いた一夏が顔を向けるが

「くーっくーっ」

とのほほんと同じ着ぐるみ？パジャマを着た春の姿があつたそれを見た一夏は異性にしか見えないと思ひながら慌てて顔を背けたがそこには箒がいた

「あのーほう・・・」

と喋ろうとした一夏目掛けて木刀を振り下ろす。一夏がかわそうとするが一夏の脳天に命中し一夏は気絶した。その一夏を引きずりながら、箒は出て行った。ちなみにその後箒によって一夏が抹殺（精神と肉体共に）殺されたのは言うまでもない。

パーティと写真撮影（後書き）

終わりました。問題あったらコメントお願いします

中国代表候補生との出会い（前書き）

いやあ、文を作るのは難しい

中国代表候補生との出会い

「ふう、疲れた」

と言いながらストライクの整備をする春がいた

「大体、代表候補生なんだから専用の整備士がいても良いのに」

と愚痴をこぼす春。春の専用の整備士は後日来ると言う話だったが来ずやむなく整備をする春がいたその頃

「ふうん、ここがそうなんだ・・・」

夜。IS学園の正面ゲート前に、小柄な少女が立っていた。

その後二人は出会う事になる

「ふう、やっと終わった」

と言いながら歩いていた春はボストンバック片手に道に迷った様子の少女を見つけたので声を掛ける

「あのーどうかしましたか？」

と声をかける春

「ここに行きたいんだけどこの場所分かる？」

と道を聞く鈴

「えーっと、本校舎一階総合事務受付ですか、分かりますよ」と笑顔で答える春、それを見た鈴は

(・・・っは!?!?なによこの可愛さ、ずるすぎない)

と思いながら道案内を頼んだ
ニコツと微笑む春に少女は見惚れるのであった。

（同姓のあたしでもドキドキするなんて）

どうやら少女は春のことを同姓だと思っているらしい。そんなことは知らずに春は少女に話しかけるのであった。

「あ、はい分かりました、着いて来てください」
と言い案内をする春

「そういえばまだ名前も言っていなかったわね。私の名前は凰鈴音、あなたは？」

「僕は、篠ノ之春です、ドイツの代表候補生ですそして二人目の男です、よろしくおねがいします」
と答える春

「えっ、篠ノ之ってあんた日本人なの？ってか男なの！……！」
と驚く鈴

「いや、男ですし、一応日本人なんですけど……」
と話す春に

「……ホントに？」
と疑いがちに話す鈴

「本当です！！ホラッ」
と言いながら生徒手帳を出す春、そこには男と記されていた。それ

を見た鈴は

「うわっ、ホントだ!!」

「だから、そう言ってるじゃないですか」

「あはは、ゴメン」

と言いながら生徒手帳を春に返す鈴

「えーと、凰さん」

「鈴よ」

と話していると校舎が見えてきたので

「ここがそうですよ」

と言い本校舎一階総合事務受付に連れて行く春。道案内を終え戻ろうとすると

「私のこと、鈴でいいわよ」

「えっと、じゃあ僕は春で構いません」

と言いつつ話していると鈴が一夏が何組なのか聞いてきたので一組だと答えるとありがとうと言いつつ受付に向かう鈴がいた。とりあえず終わったと思った春は着替えるべく部屋に向かった

中国代表候補生との出会い（後書き）

すいません、文章力がないので就任パーティと鈴の登場シーンを分
けました。何か有りましたらコメントおねがいします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0220y/>

春とIS

2011年11月21日11時37分発行